



柴田氏の講演会

米沢支部の講演会と会員交流いも煮会は9月6日(土)、アクティー米沢で開催された。講演会は昨年に次いで2回目。講師に山形大学産学連携教授第一号の柴田孝さん(本会支部産業部長)を迎え、「地域活性化策と山形大学の役割」と題して講演。会場には会員のみならず、大学生や企業人など約80人が聴講した。



終了後は講師を囲んでのいも煮会を開催し、会員相互の交流を深めた。



第 18 号
平成21年2月1日
発行者
社米沢有為会米沢支部
支部長 安部三十郎
米沢市金池5-2-25
☎ 0238-22-5111

我妻榮記念館のオーラ

我妻榮記念館館長 伊藤和夫



記念館に見学に見える方は法曹界関係者が圧倒的に多く、「民法の我妻榮」と今なお法曹界に名をとどろかせているからだと思います。昨年の夏、丁度私が当番をしているときでしたが、ある大学の法学部の先生お二人が記念館の見学に見えました。館内を一巡してから、私に「入館料は取らないんですか？」と尋ねました。お二人にとって神様のような存在である我妻榮、書物や話で知る距離感ではなく生家に足を踏み入れて今日の前にいるような近さで我妻榮の存在を感じ取られたのでしょう。記念館の価値の大きさからすれば無料では勿体ないのではないかとの思いから先のお尋ねをされたのでした。

記念館の二階は我妻榮の勉強部屋ですが、そこに昨年一冊のノート置いて見学者に自由に感想を書いてもらっています。感想から二つ拾ってみましょう。「これほど偉大な方が同郷におり、同じ空気を吸っていたと思うと、浅学な私のような学生でも少し胸を張れそうです。」と法学部に学ぶ学生が書いています。「せっかく米沢にいるのだから、一度足を運ぼうと思っていました。勉強部屋には無駄な物がなく、これだから雑念が入らずに勉強できたのではと思いました。部屋も整理し、勉強に励もうと思います。」と市内の生徒が書いています。

他の感想も仕事や学問に頑張っていきたいという決意に満ちたものがほとんどです。記念館に入りしばし竹めばそこから発するオーラが見学者の心をとらえ穏やかなうちに自らの有り様を見つめさせてくれるようです。我妻榮の生家であればこそその記念館の価値はそこにあると私は思います。多くの方に記念館に足を運んでもらって、ひととき我妻榮と心を通わせてみてはいかがでしょう。特に市内の子どもたちには是非来て欲しいと思います。

会員倍增キャンペーン

(社)米沢有為会は今年創設二〇周年を迎えます。これを契機に会員倍增キャンペーンを実施しています。会員みんなが一人一名ずつの会員募集に協力くださるようお願いいたします。

現在、会員は全国で二二〇名ほどで、米沢支部会員は六〇〇名です。会員の皆さまには、歴史と伝統ある本会の人材育成事業を誇りとし、今後も継続されるよう一層のご理解とご支援

をお願い申し上げます。

普通会員	年額	三、〇〇〇円
特別会員	年額	七、〇〇〇円
賛助会員	年額	一〇、〇〇〇円

米沢支部役員一同

本会二二〇周年記念事業

有為会では二二〇周年記念準備委員会を設置して次の三事業を計画しました。

- 一、二二〇周年記念式典
- とき 平成二十一年六月二十八日(日)
- ところ 伝国の杜
- 二二〇回定時総会と合わせて式典を挙行し記念祝賀会を開催する。(上杉城史苑)

新しく会員になられた方々

(平成二十年四月〜二十一年一月)

加小尾大大遠遠遠梅今今井磯磯秋相
山形久河原藤藤藤津成井上部部葉田
修文忠英邦真孝宏和幸幸敏榮秀見 克
一子裕一正樹志三博輝裕博子樹輝茂平

齋齋齋近近金小小黒北川鹿金金片
藤藤藤野野 林島鯖田沢崎俣子子倉
峰裕賢 洋左俊政卓 幸信 信周良
彰司二修一門次行二悟晃昌一浩弘治子

情鈴須菅白志島洪設三佐佐佐佐 寒河江
野木崎野石摩津間楽身藤藤藤竹木
裕宏登賢信宏真佳由隆忠総清和俊
子治志二也之一美利雄次吉二男明智茂

野中中内鳥土辻武武竹竹高高高 大道寺
呂村村藤海屋 田田田田橋橋橋 七兵衛
圭彌智文隆 雅敏 和 善隆嘉昭
司一和徳太宏人男悟則明彦夫門紀

渡渡我我山山守宮宮三松本星福樋半橋
辺部妻妻口木谷坂考知裕孝作和 和義
(敬称略) 龍慶 道 英古 弥之義助彦進隆彦和

一、二二〇周年記念行事

- とき 平成二十一年十一月十五日(日)
- ところ 日本都市センターホテル
- 当日記念講演を開催する。
- 講師 井上ひさし氏
- 祝賀パーティーを開催する。
- 一、二二〇周年記念誌の発行

通常の会誌に記念事業や有為会の歴史、興讓館寄宿舎一〇〇周年のあゆみ、奨学制度の変遷などを含めて編集する予定。

～ 活躍する会員紹介 ～ ⑥

宮坂考古館長 宮坂直樹



伝前田慶次所用甲冑

(財)宮坂考古館の理事長として、米沢・置賜地方の考古、歴史、民俗資料のほか米沢藩の貴重な文化財を収蔵・展示する登録博物館を運営する。祖父善助が収集し資料館として展示していたものを昭和48年財団法人とした。

また農業の傍ら、米沢藩に伝わる火縄銃の稲富流砲術の発砲演武を伝承している。上杉まつり川中島模擬戦での発砲や歴史親善都

宮坂直樹



市、姉妹都市などでも披露している。昨年は鉄砲伝来の地種子島で全国24の火縄銃保存会と共演し、米沢30匁筒の威力を披露、轟音をとどろかせた。

今年には直江兼続が主人公のNHK大河ドラマ「天地人」が始まり、伝直江兼続所用の梵字普賢菩薩前立甲冑と伝上杉景勝所用の鳳凰前立甲冑並びに伝前田慶次所用の朱塗り甲冑が人気である。昨年の前田慶次展では1ヶ月で3000人を超える来館者があり、前田慶次ファンが全国にいることを再認識した。景勝、直江の主従を慕って米沢藩に仕官し、米沢堂森で没したと伝わる慶次の本当の姿を求めて今年も多く来館者が期待できる。今後も春、秋の2回前田慶次特別展を開催するなど時宜に合った魅力ある展示を開催していきたい。

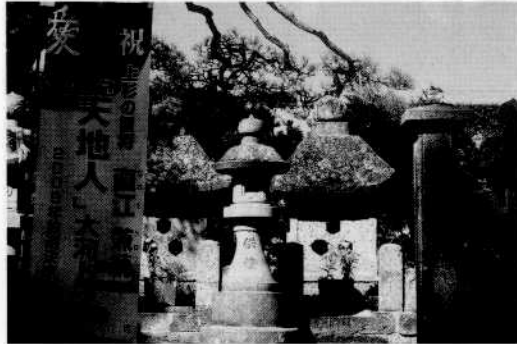
直江兼続夫人お船の方について

お船の生い立ち

お船の方は弘治三年（一五九七）上杉謙信の譜代の重臣である与板城主直江大和守景綱の娘として生まれました。景綱が五十歳を過ぎてからもうけた娘でした。お船が二十歳のとき、父景綱が亡くなり、総社長尾家の次男景孝を婿に迎えました。謙信のお声がかかりであったとも言われています。景孝は与兵衛信綱と名を改め、景綱の後を承けて上杉家の奉行（家老職）の役につきます。

夫と連名の安堵状

お船が結婚した翌年の天正六年（一五七八）三月、突然上杉謙信が亡くなり、その後継をめぐる「御館の乱」が起こります。直江信綱はこの内乱で景勝方として大いに働きました。その時信綱は、功労のあった与板衆に褒美としての発給文書をだしています。注目すべきは、その中に信綱の名前と並んで「おせん」



という署名と捺印のあるものが見られることです。安堵状（あんどじょう）。土地の領有（証明書）などに彼女の名が記されていることは、その発給文書をもらう側の家臣がそれを望んでいたからで、与板の家臣たちのお船に対する信頼と服従心がいかに強かったかを裏付けるものです。

兼続の入婿と与板衆

天正九年（一五八二）九月、春日山城で毛利秀広が突然乱入して奉行の山崎秀仙を斬殺し、側にいたもう一人の奉行

である直江信綱も巻き添えを食って斬り殺されるといふ事件が起きました。奉行二人が急死するという緊急事態を乗り切るために、上杉景勝は、最も信頼できる若い側近の樋口与六兼続に、直江家に婿に入り信綱の跡を継ぐことを命じました。こうしてお船は二度目の夫として三歳年下の兼続を迎えることとなり、兼続はまた直江という上杉家譜代の名家の名跡を継ぐことによつて、名実ともに景勝の股肱の臣として存分に手腕を揮うことになるのです。兼続とお船とは従姉弟（いとこ）であったという説がありますが、確証はありません。

上杉家の奥

総取り締めりとして

上杉景勝の正室は武田信玄の娘菊姫でした。菊姫は「御館の乱」の年に輿入れしまし

兼続没後のお船

たが、六年後の天正十二年（一五四八）、豊臣政権下の証人（人質）として京都の伏見に送られ、以来上杉家が越後から会津、米沢と移封された後も領国に帰ることなく生涯を伏見で終えました。その間、お船も証人の立場で伏見におりましたので、菊姫の傍らで話相手となり、淋しさを慰めてくれたものと推測されます。慶長九年（一六〇四）五月、景勝の嫡子玉丸（後の二代藩主定勝）が誕生しました。生母は側室四辻氏でしたが、玉丸を生んで間もなく病没しましたので、玉丸は江戸に証人として送られました。付き従ったのはお船でした。お船は、上杉家の最も困難な時代に、領主の正室も若君玉丸の実母もいない江戸屋敷で、奥向きの総取り締めりの立場に立つて陰から上杉家を支えたのです。

兼続没後のお船

兼続は元和五年（一六一九）、六十歳で亡くなりますが、二代藩主定勝は、残されたお船に奈良・京都・高野山への参詣大旅行をさせるなどして慰

め、さらに化粧料として三千石を給し、四十人の手明（下級武士）を従属させるという破格の取り扱いをしてその功に酬いたのでした。

お船は、兼続の没後も上杉家家臣団、特に与板衆をはじめとする直江自分衆（兼続の下で働いた実務家たち）の精神的支柱となつて、表向きの政治についての相談にもあずかっていたようです。公式記録である「上杉家御年譜」にも、「直江後室……兼続卒した後、国政を与り聞く故に群臣の崇敬他に異なり」と記されています。

お船は晩年兼続の志を継ぎ、「文選」（中国の代表的教養書）三十冊の再版を成し遂げたり、早世した嫡子景明と兼続の菩提を弔うため、高野山に立派な宝楼閣瑜祇塔を建立したりした後、寛永十四年（一六三七）江戸の鱗屋敷で亡くなりました。享年八十一歳でした。兼続、お船の死を以て直江家は断絶しました。二人の遺志だったと言われている。夫妻は今、米沢の林泉寺で、並んだ墓の下に眠っています。（曾根伸良）

